

妻最後まで園児救出

鎮魂の祈り

「子どもたちの世話をします」。このメールが最後のやりとりとなった。新地町の広畑仮設住宅に入居する中曽茂さん(60)の妻順子さん(当時49)は宮城県山元町の私立幼稚園に職員として勤務していた津波被害に遭った。園児計51人乗せた2台の送迎バスが津波で流され、園児らの救出で力尽きた順子さんは帰らなかった。「妻が

新地の中曽さん



順子さんの写真を手に、思い出を語る茂さん。悲しみは今も消えることはない

いたら、いろいろと助言をしてくれるのかな」。月日がたったからこそ存在を強く思う。



家族と一緒に記念撮影する順子さん(右) = 2008年6月

普段と変わらない一日でした。欠かしたことのない弁当がその日も家族分置いてあり、それぞれの職場に向かいました。

山元町の建設会社に勤務する茂さん。自宅は新地町埴木崎の海岸沿いにあり、義父の三宅実さん(当時74)と義母のよしみさん(当時74)は在宅中に津波の犠牲となった。

茂さんの「大丈夫か」というメールに、順子さんからの返信は園児の世話をしていることを



ために職場に残った茂さんは不安な夜を過ごした。翌日、幼稚園に行く知り合いが両手で「X印」を作り、全てを悟った。

子どもたちのお祝い事や、クリスマスのイベントなどを大事にしていた。毎朝朝3時ごろには起床してコーヒースタマを飲んだり本を読んだり一人の時間をつくり、みんなの弁当も用意していたんです。

順子さんの両親はかつて旅館を営んでおり、子どものころは十分に構ってもらえなかったようだという。

順子は4人の子どもたちには自分のできることをしっかりしていたんだと思う。新しい住宅の内装や間取りはあっさり決めましたが、順子ならいろいろと言ってきたでしょうね。

順子さんが子どもに残したもののなか、次男の渉さん(26)は母と同じように幼稚園で働くため、4月から短大に入学する。

次男の決断は本人の意思が大半だと思いますが、ほんの少しは順子の影響があるのかな。